女學雜誌

一冊六錢

各土曜日出版

第百八拾貳號

當府内無郵稅

郵稅五厘

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

雜 女 學 誌

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 182. OCTOBER 5TH, 1889.

第百八十二號目錄

EDITORIAL:—The Woman's Friend (No. II.) Causes of Inequality and its Preventative.

LEADING ARTICLE — Party Spirit and Woman's Harmonizing Influence.

CRITICAL NOTES:— A Query on a Former Subject. The Answer to the Same. A Text-book on The Red Cross Society's Nursing System.

MISCELLANEOUS:—The Safe Ground. Which is the Greatest? The Wild Daisy. Be not Cruel to the Dumb Brutes.

NOVEL:— "Grandmother's Room."

HISTORICAL RECREATIONS:— Mrs Hutchinson.

CHILDREN'S COLUMN.

CONTRIBUTED ARTICLES.

GENERAL NEWS.

FOREIGN NEWS.

社說 婦女子之友
論說 黨派心及び女性の融和力
批評 「小說論略」筆者に再問す○謹んで瀧背に申す○看護婦人會教程
雜錄 安んずる處ろ○英雄何處にある○演說者及び令夫人○野菊○動物を虐待す可らず○月に對して
笑草 半口ならばせつかい○借りる時の婚覧顏○くらやみに車○さるさりのいはく○半分はかけね○寅の年でなくて仕合
兒籃 船長の話〜
史傳 ルシー、ハッチンスン夫人の傳
小說 お向ふの離れ(若松しづ)
寄書 偶得二則
社告 女學雜誌改進の機
開書 三件
新報 人物論○婦人傍聽者○文學者の德義○女性は買物の長者なり
片々 慈善會○日本赤十字社看護婦人會○外六件

WOMEN IN JAPAN.

(1) *The Woman's Temperance Society are also exerting themselves for the same object. Mr. Shimada is expected to speak at their meeting to take place in a few days. Tickets for admittance are to be printed and sold at both these meetings.*

(2) *The Charity Hospital of Tokyo has established a separate Department for the treatment of female diseases. Dr. Okami, a graduate of the Woman's Medical College of Philadelphia is to take charge, assisted by Dr. Honda.*

(3) *Miss Kin Kato who lately arrived from America is working in the Kindergarten as well as in the Normal School.*

(4) *A series of lectures on Buddhism is to be given by learned men of different sects for the benifit of the sufferers from the earthquake and the flood.*

(5) *The Chinese are preparing to add houses of ill-fame to the already existing number of these places in Yokohama. Of course they count upon the privilege they should gain by the treaty revision. We hope that the Temperance ladies would exert themselves to prevent the incoming of this vice.*

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

女學雜誌 第百八十二號
明治二十二年十月五日發兌

社説

○婦女子之友

第一　不平等の淵元、及解毒劑

世に高下尊卑の差別あるは、人に同じからぬ所ろありて扨て起り來る所ろのものなり、何を以て貴族は尊とまれ野民は卑しまるゝやと云ふに、先づ貴族野民と云ふものゝ上に高下の別ち定められたればなり、之に均しく何を以て彼の總理大臣は高しとせられ、玄關の門番は下だれりとせらるゝかと問ふに、之れ亦た初めより大臣と門番とに尊卑の差ありと思わるゝが故あるべし、左れば一切の高下尊卑は人の居る所ろの地同じからず遇せらるゝ所ろの樣均しからずして初めて起り來るものと云ふべし。

然るに、天の常に高きが如く、地の常に低きが如くに相違したるものは、此の相違永遠につゞくべくして人の如何んとも爲し得べきにあらずと云へども、若し夫れ石を積みて丘と爲して高く、地を掘りて穴と爲して低きが如き相違にてあらんには、此相違も人力にて成りたるが故に亦た人力を以て改め得がたきに非じ。此を以て天と地と神と人との如くに相違ふ所ろのものは之を自然常久の差別と云ひ、其の高下尊卑の懸隔は之を正當永遠なるものとし視るべきあり、但だ彼の地の上に丘あり、地の下に穴あり、人の上に人あり、人の下に人ありとするが如き、所云る人爲不自然の手段によりて相違ふ所ろのものあらば、吾人は稱して之を暫時假間の差別となし、其の高下尊卑の懸隔を以て不正當不永遠なるものとし視るべきなり。

然らば男を以て女に優れるものとなし、男女素と同等にてあるまじきものと定めたる、彼の男尊女卑と云へるは何如ん、此れ抑そも天來恒定の差別ありて然るものか、若くはたゞ人爲不自然の定めによりて然るものかと云ふに、論ずる迄もなく世上の我儘なるより起り來れるの變態なり、故に今の如く男を以て高し尊しとなし、女を以て下くし卑やしとなすの差別は、固より亦た男女に先づ同じからぬ所ろあるを以ての出來事なれども、此の相ひ同じからざる所ろは決して正當の世にて起るまじきものなるが故に、苟くも天工を助け、人事を善治せんと欲するの志士たるものは、勉めて此の不正當より發するの不同均を改ため、以て男女の上に現はれ來る高下尊

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

卑の差別を平等にせざる可らず。

抑そも人は相似たる所ろ多く、相違ふ所ろ至つて少なし、彼等は同じく天の下に立ち、地の上に列び、身の丈け略ぼ相かなひ、容貌骨格大方は相似たり、而して其生るゝや皆な呱々として鳴き、其死するや同一の塵芥に化す、偶ま早世長壽の異わりと云へども、先後すると七十年に超へず、夫れ人は如此く相似たる所ろのもの也、而して彼等十數億の民皆な一々に相異なり、互ひに高下尊卑の別を畫して悉とく相ひ同ぜざるは何んぞや。之れ彼等の身躰生死に甚たく相似たる所ろありと云へども、其身躰以外に於て大ひに相似ざる所ろのもの少なからぬがゆへ也。

思ふに人をして相ひ似ざらしむる所ろのもの、特に彼の男女をして相ひ異ならしむる所ろの原因に至りては、必らずや左の十項目の一以上之れあるに由らずんば非ず、即はち、

第一　躰力の相違

躰力に相違あるときは相撲を取りても勝ち負けとなるなり、而して男子は大低女子よりも躰力の强きものなるがゆへに、若し躰力の强弱によりて尊卑高下を生ずるの世に於ては、女子は必らずや常に男子よりも卑さく下れるものにてあらざる可らず。

第二　智識の相違

利巧なるものは優り、愚なるものは劣る、特に學術智慧の戰ひを以て勝敗を决するの世に於ては、智識に於て大なるものは必らずや其の小なるものを制すべし、故に苟くも智識にして男女相同じきを得ずんば、彼等の一は尊とく他は卑しからざるを得ず。

第三　長所の相違

たとひ智識に於て相同じきを得ずと云へども、若し兩人各自に特得の長所あるを得、而して其長所を自由に發達するとを得ば、人即はち互ひに平等なるを得べし、苟くも然らずんば勢ほひ之に尊卑高下の別を生ぜずんばあらず。

第四　道德の相違

然れども尤も强く人を動かすものは道德の力らなり、若し道德堅固にして聖善純美の化温かきを得ば、たとひ智慧に於て達する所ろなく、長所に於てまさる所ろなしと云へども、尚ほ能く人を服するに足るべし、故に道德の善悪によりて高下尊卑を生ずると勿論あり。男女果して何れか淸き、何れか善なる、若し之を自由に道德の勢力を現わし得べき境界に放た

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

ば、其の清善なるもの即はち高尊ならざる可らず。

第五　教育の相違

よし人の素質に於ては大ひに優劣する所ろなしと云へども、若し其一を教へて賢たらしめ、其一を棄てゝ琭々たる土石に止まらしめば何如ん、崑崗の玉よく光を發すべし然れども先づ之を取つて切磋琢磨せざれば砂石に均し、故に教育を受くるの有無によりて尊卑高下を生ずるや論なし、假りに女子をのみ教へて男子を教ゆるとなくんば、上み帝王より下も匹婦に至る迄で惣べて女子の世界となるべし、而して若し女子を教ゆるとなくして只だ男子をのみ教育するときは、男女の間に大ひなる高下尊卑の別を生ずるや明けし。

第六　習慣の相違

第七　便利の相違

此等の事亦た細述するを要せず、習慣は一種の縄にして政法外に人を束縛するなり、便利は一種の自然力にして五官の外に人を助くると多し、故に習慣もし一人を偏愛せば此人必らずや他よりも尊とかるべし、便利もし一人を偏愛せば此人亦必らず他よりも高きものとなるべし、苟くも習慣公平にして便利同一ならば可なり、萬一若し然るとなくんば必らずや故さらに高下尊卑の別を起し來る。

第八　財産の相違

第九　政權の相違

第十　律法の相違

富は力ら也、之れ有るものは之れなきものを制す、政權は政事上に於ける權力なり、之れあるものゝ之れなきものに優ると言ふを待たず、若し夫れ同一の律法にして他之を侵すときは擯罰し、我れ之を破るとき容赦せらるゝに於ては、我の能く他を制すると固より也、左れば一方に財産を與へて一方に之を與へず、一方に政權を與へて一方に之を與へず、一方に律法を科して他に之を許すときは、此の兩者の間だに尊卑高下の差別を製造するや必然なり。

故に人世に於ての高下尊卑は多くは此如き諸元因の一もしくは一以上より起り來る、苟くも此の諸元因にして到底免かる可らずんば高下尊卑の別亦た到底免るゝとを得べからず、然るに俗情たゞ故意に之を造りて徒らに如此き元因を製するとせば、苟くも道を愛し、眞理を保護するの君子たるものは奮然起つて之を打破せざる可らず。

眼を放てば風吹き水の流るゝを見る、蓋し是れ空氣の厚薄す

三

るを調へ、水氣の乾濕するを均からしむものなり、轟然として雷鳴り、噴裂して地中の火迸ばしり出づ、豈に是れ偶然ならんや、必竟たゞ雲氣の欝するを散じ、地火の激するを吐くのみ、天地の調和すでに如此し、人類豈に獨り不平均、不平等を以て永遠に存するものならんや、貴族慾に耽けるときは自由軍起り、王者權に擅ひまゝなるときは革命の戰ひを來たす、安んぞ只た男性女性を壓して久しく之れを足下に踏付るとを得んや。

故に今の女性が種々の元因に於て大ひに男性に劣るあるに關せず、彼の不正當不自然なる束縛を解いて兩性を自由界に併立せしめ、以て人爲の我儘に由りて生じ來りたる高下尊卑の差別を撤去せんと勉むるもの少なからず、此の大仁なる方向に向つて盡力するものは即ち女性の友なり、此の方向に逆らつて故意に舊惡の弊俗を維持せんとするものは即はち女性の敵なり、世上甚はだ婦女子の友に富めり、姉妹諸君審らかに之を察せざる可らず。

蓋し人世の不平等、特に男女間の不同等を起すの邪因凡そ十あり、故に此の邪因を除き得る所ろのものは大率ね皆な婦女子之友にあらざるはなし、曰く文明、曰く平民主義、曰く平等主義の宗敎、曰く靑年、曰く個人主義、曰く一視同仁の君子、公平無私の學者、道念高潔の義人、曰く弱きを助くるの俠士、習慣に慣ふるの英雄、の如き即はち是也。

論說

○黨派心及び女性の融和力　井上次郎

余は方今の政黨なるものに付きて論ずべき資格を有せず、又た之を論ぜんとを希ふものにもあらざる也、然れども此頃ろ新聞紙上に於て樣々の怪報に接し、憤慨胸を衝きて沈默するとを得ず、此際敢て女流同胞の深き注意を仰がんと欲する者あり。近來世上に於て條約改正の問題甚はだ騷雜を極め、二大政黨舉世の力を盡して奮戰す、曩には大同派及び一味同志の面々和合して改正中止の大演說會を催うしたるが、此頃に至りては改進黨の方々暗に之に應じ、全く反對に出でゝ改正斷行の演說會を開かれたり、然るに三日間に於て辨士大凡八九十名交る〲演說せられたる景况を聞くに、或はノゥ〱と叫ばれ、馬鹿と罵しられ、無暗に手を叩かれ、土瓶を放り付けられ、草履を投付けられたる由あるが、更らに甚はだしきは舞台に押登りて之を妨んとする者、内外一齊に聲を合は

せて満場をわめき潰さんとするものに出會ひ、辨士多くは口を開くのみ、其聲聞かれず、聲の聞かれざるのみならず口を開くとすらなくして退ぞき、或は三分、或は五分、或は八分、尤とも多くして十分、十五分、二十分にして何の辨じ得たる所ろもなく演壇を下られたりと云へり、而して此方に於ては改進黨萬歳と叫び、彼方に於ては改進黨盡滅と叫びたりとか聞けり、余は之を傳聞して喫驚の外なし。

抑そも此如きが今の大日本帝國政黨の爭そひにてある乎、而して此の政黨は實に能く國民各半の意見を代表し、保護し、以て國家人民の幸福を擴張するに足るものなる乎。

抑そも政黨あるものは何に據りて起る乎、彼れ決して徒づらに騷がんとして起るものにあらじ、又決して只だ人に敵せんとして起るものにもあらじ、其起るや實に止を得ざるに由りてあり、苟くも一問題の可否明白に分り、其國家に於けるの利害火を見るが如くに明らかにてありとせば、國民何によりて相敵し、故さらに黨を分つて同胞互ひに相反くとを爲さんや。只だ夫れ一問題の起り來るとき、其可否利害に關はりて明白なるを得ず、或る人は之を可とし、或る人は之を否なりとし、或る人は之を利なりとし、或る人は之を害なりとなすに至りて、茲に初めて意見を異にするもの生ず、而して意見の異なる所ろのものは相ひ同心なるを得ず、ゆへに同心のものの相合して其意見の異るものに對し、互ひに相ひ考ふる所ろを討論して實に其事の可否利害何如なるやを窮るを要とす。

然るに國民の數三千九百萬にして、論者の數亦た之に稱ふるが故に、同志の人只だ二三合して數箇の異論者に對し、其研究する所ろの決果を以て直ちに其事の可否を定るとを得ず、此に於てか同志の人いよ〱相合して其同志者の幾干ありやを計り、異論の人また相合して其贊成者の幾干ありやを計り、相ひ其數を較らべ、其勢力を較べ、其議論を較らべ、更らに中立無言の人の贊成の多少を較べて、以て其の事の利害何如を判決する也。國家もと一人の國家に非ずして實に多數國民の國家なるが故に、之が爲に其大事を決するに於ては勢ひ如此きの多數決に由らざるを得ず、之を政黨あるの本理となし、亦た眞とに如此くなるを以て政黨の本色となす也。

政黨の起る實に如此く、其の當に望むべき所ろ實に如此しとなさば、彼は先づ其味方の數力何如あらんとを丁寧に吟味すると共に、亦對敵の數力の何如あらんかを仔細に吟味すべし、如何んとなれば其數力の優劣する所ろは即わち大事を決する

五

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

の權衡にして、標準を正當に求め能ふの點更らに他にあるなければ也。然らば則はち政黨の爭そひは極めて嚴肅なるものなり、彼の相鬪ふや極めて謹嚴にてあらざる可らず、當に神を澄まし、情を清くし、謹んで競爭試驗の決する所ろ何如がにてあるやを窺ふべし。此時に於て、我は他を罵りて只だ他の倒れんとを望む、未だ初めより十分に我が意見とする所ろを述べざる也、而して他の意見を述べんとするものあるときれ之を制し之を抑さへ故意に彼が口を塞ぎ咽喉を壓し以て言ふ所ろなからしめんとす、若し彼等最初より喧嘩を爲すとならば夫にて濟し、苟くも眞正なる政黨の爭そひを爲さんと欲するに於ては之れ自から其目的を破るものにあらずや、况んや國家の重大問題を決せんとするに於て何ぞ如此くんば、抑そも之を何とか云ハん。

凡そ人は至つて馬鹿なるものなり、彼れ果して何程の事を知らんや、彼が一身を處する殆んど暗路を行くに似たり、况してや國家の大事を決するに當りては彼れ抑そも幾干の事を知らん、故に勉めて謙遜となり、謹しみて眞理に問ひ、同胞相協力して其の事を何如に處理すべきやを相談すべし、此相談の討論會なるもの即ハち政黨の聲となり、國人其聲を相ひ合はせて以て該事の果して如何にすべきやを議決すべき也、此時に當りて互に相讓り、我が主張する所ろ完全無欠にして天下此他に道理あるなしと云ふに至つては甚はだ笑ふべき也、其の熱心に眞理と思ふ所ろを保護するは殊勝あり、然れども之を保護すると共に此は自らが眞理と思ふ所ろのものなりと覺悟すべし、全能の上帝に非ずして安んぞ絶對的に之を眞理なりと認知するを得んや、然りと云へども唯我獨尊と自信して此如くに驕るものは何ぞ採るべき所ろあり、之によりて天下人を愚にし、敢て他の言はんとする所ろを止め、其如何なる議論するに拘はらず、其の反對黨の口より出るが故に決して聞く可らずと云ふに至りては、國家を愛せざるの極蓋し之に過たるは非ず。

余れ素と政黨なるものを好まず、然れども政黨あるは實に止を得ざるとなるを信ずるが故に敢て其政黨の當に然るべき性質に存せんとを祈る、自由主義の束縛主義に反對する例せばルーテル等の法王に於ける、チコンテルの壓制吏に於けるが如き、實に尤も高きもの也、其他貴族主義と平民主義と、王黨主義と共和黨主義と、立憲主義と封建主義と、合同主義と獨立主義と、國家主義と個人主義と相鬪ふが如き、實に其正當

ある者也、其他大事に臨みて賛成不賛成の兩大黨をわかつが如き政治黨派の上に於て其尤も發達したるもの也、此等は其の相爭ふや實に當然なり、故に余は亦た其の當然の爭を盡して眞正の果を得べきことを祈る。

今日、兩大政黨の起り來れる抑そも故なきに非ず、余は其の實に正當の理由によりて起りしものなるを信ぜんと欲す、然れども其の實に當然の法方を盡して相爭ふや否やに至つては眞とに欵ずる所ろなくんばあらず、演說者の口を塞ぐは猶ほ討論者の咽喉を扼ゆるが如し、紙上討論の自由を停むるは相手の舌を拔くが如し、如此にして而して後ち眞理を討論せんと欲す豈に啞人と議論せんと欲するにあらずや。

ワクスマッス曰く、世上の萬事はすべて進む、然れども政黨は進化せざる如しと、余は其言の僞わりならんことを祈り、特更らに日本國の政黨に適考して全く其暴言ならんことを祈る。

嗚呼日本國は男子のみの日本國にあらず女性も實に之が國民たるなり、卿等今の國勢を見て實に安しとなし、如此き男性の名士に國を托して安穩太平なりと信ずる乎、余は卿等を驅つて政治社界に出陣せしめんと欲するに非ず、唯だ卿等が之に對するの同情切ならんことを祈る也。

聞く婦女子を混ぜざるの宴會には喧嘩多しと、蓋し客粗言亂暴にして謹しむ所ろ少なきが故ならん、之を以て英米の政治界には婦女子の保和會なるものを添附す、即はち有爲温才の婦人女王となりて一種の交際館を造り、其周圍に時の政治家を引つけて各自をして相ひ融和せしむ、喩へば母、喧嘩したる子供を集めて之に仲直りせしむるに似たるあり。

嗚呼如此き事業に於ける婦女子の勢力は實に驚ろくべきもの也、女性は奇異なる魔力を有す、余は此の魔力の之より政治界に向つて働らき出んことを願ふもの也。

批評

○「小說論畧」筆者に再問す

松羅堂主人

淺薄未熟な議論には馬蹄の塵をもかけ給はずと思ひきや堂々と數千言の大議論を惠まれては其まゝ甲を脱ぎて降參しても主人が榮譽は莫大なるに再び反駁の餘地を與へらるゝに於ては何を以て其深切を謝し其好意に報ずべきや、思ふに妄言虎威を犯すの外はなからん。

記者の說は凡て余に反せり。前に末葉に涉りしは末葉の既に異なるを示して精神の全く背馳せるを說きしに末葉に拘執せ

りとて記者の叱咤を受けたればまづ其精神をたづねて記者の再敎を乞はん。

所謂「小説論略」の精神とは小説其物にあらで批評にあるならん。百七十二號に、

「夙に其名著作なりと信ぜらるゝ處のものを世に出して窃かに世評の溫冷如何あらんと掛念せらるゝもの多し(中略)曰く小説とは必ずや如此きものなり、曰く小説家とは必ずや如此きものなりと其論評甚だ博くして意見益々狹し其見識極めて西洋風にして議論愈々陝し(下略)」

又曰く、

「凡そ局促狹隘なる批評、論定ほど人才を殺すものなし、今や將に起り來らんとするの新小説家まゝ先輩の議論に誤まられて其天稟の長處を沒するものあり、彼等自ら顧みて、如此くばわれ小説家たる能はざるかと憂思す(下略)」

かゝれば説の精神ある處は今の批評家極めて局量狹くして勝手氣儘に小説の範圍を狹くし以て文學の發達を妨ぐと云ふにあらんか抑も記者をして此説あらしむるには必ずや一の激するものありて今の批評家を責めらるゝなるべし。然らずんば一二の先哲が詞を持出して無責任の説を放論する靑年書生にあらずして平生謹嚴を主とする記者が何ぞ斯る説を述んや。縦令記者は自ら多識せざれば迷に落ちずと傲らるゝとも今の批評家の局量狹きに悲憤せらるゝなれば何ぞ少なくも二三批評家の批評文を引照して是を叱責せられざるや。平生記者は最も嚴正にして忌憚せざる説を吐かるゝに何ぞ獨り今の批評家に憚り例證をも擧げず準據をも示さず＝西洋人の糟粕を嘗め＝云々と彼等を罵りながら却て二三西洋人の説を持出し無責任の議論を爲し局量狹き批評家に冷笑せられて安ずるや。

蓋し批評は文學の美を顯はし一ッには作者の天才を世に披露するを職務とするなれば世の文學を稗益する事も少からず、彼のハズリット或はクレイクのシエークスピーヤに於ける如き大に後代の則ともなれば余と雖ども其貴重なるを知り、もし果して女學記者の如く今の勢力ある批評家にして局量狹少たのものらば大に是を責めざるべからず。然るに如何せん余が見る處全く記者と異なりて今の批評家却て寬大なるかと考ふ。批評は深遠なる觀察を要す、願くは八百倍の顯微鏡をも用て賄の飯一杯——寧ろ一粒の中にも數萬の戰爭數万の愛戀籠るを驗察し、若し出來得べくんば化學の力を假てなりとも細密に分析致たし。ドライデンが曾て歌し如く水面に浮ぶ

嗤を取て批評の本分を盡し得たりとするは大に笑ふべき事にてかゝる似而非者多ければ終には文學の嗜好を亂さん。今の批評家を局量狹しと曰ひし女學記者すら百七十號雜錄欄内に於て批評眼と題して「其遠識と共にいよ〳〵細かく見、其近眼と共に益々深く觀察し得るに到りしは批評の眼なり」と曰はれしを見れば批評の細かく且深きを要するは記者も許す處あるべし。既に前に於て是を許し新たに說を立つるに當つて局量狹き批評は世の天才を沒すと歎ぜられしはそも細密なる批評を以て世の文學に害ありと考へらるゝや。記者が所謂局量狹きとは如何なる類の批評を指て曰さるゝや。余はもし万一にも今の文學者中に嫉妬偏執の念を抱きて批評さるゝ人あらば兎に角公平なる意見を以て小說と目すべからざるものを小說にあらずと云ふに何の不可か是れあらん、現に斯る說を立つる人々を意見狹しと罵られたる女學記者其人にして百六十八號に「證詞の百合花」を評して‖決局一條の實事物語を承はるの心地し到底小說とは思はれず‖と曰はれしならずや。余は此書を見ざれども若し然らんには批評も妥當なりと思へど批評を作りし人則ち「小說論略」筆者は是を狹量ありとして悔るや。リアルと云ひアイデアルと云も畢竟細密なる批評眼の効す處にして是を喋々するは批評家より曰へば最も肝要の事にて寬大なる女學記者の如く渾全全一躰と看做すを得ざるなり。勿論其好む處に僻して或はリアル或はアイデアルと一方を偏重するは余も欲せざれど各々其奉ずる處に準據して說を立つるに何の不思議ある事あらん。例へば女學記者の如く世の中最後には樂園となりて圓滿無缺なる意匠淸潔道念純厚の小說出づべしとの理想を抱いて小說を論ずるもあるべく又縱令記者は滿足せざるも客觀主觀の區別を立てアイデアルとリアルを別つドクトル、カイ子氏の如きもあるべし。記者が‖彼は狹量あり‖と眉を顰むれば一方には‖彼は寬に失す‖と皺を寄する人もあらん。朱熹の門は朱熹に依て敎を立て陽明の派は陽明に依て經を講ず、もし朱熹の門に遊ぶ人陽明を奉ずる徒を笑はゞ陽明の派を酌む人又朱熹を奉ずる徒を笑はん。說の異なる處を守りて敎を立て互に相爭ふは古今東西全一にして是が傍側に立て其偏僻を笑ふは達識に似たれど道に熱心なる者にあらじ。今のリアルを奉じアイデアルを奉ずるも是と全じく極めて文學に冷淡なる者に非ざるよりは何れかリアルを好み又はアイデアルを好まざる者あらざらん。リアルにも長處ありアイデアルにも長處あり、然ども其長處の

量の多少は各々奉ずる處に依て說あるなり。苟くも批評を爲すに當り是等の說を等閑にするは豈其の人々の忍ぶ所ならんや、よし忍ぶべしとするも細密なる批評を下んとすれば勢ひ爰に及ぶは免かるべからず。記者はリアル或はアイデアルなど、喋々し漫りに小說の定義を下すは大に後進の發達を妨ぐ一換言すれば文學に害ありと云ふ、然らば細密なる批評は文學に益せずと云ふや。嗚呼、余は是迄諸氏の說を讀みたれども不才淺識にして未だ此卓見あるを知らず又聞かず、抑も先哲の餘唾を甞めず多くの書を窺はずして獨見を立てたる記者の達識か。

アヂソン曾て當時の批評極めて亂雜にして追從輕浮の言を並べ或は戲謔滑稽を弄するに過ぎざりしを歎じ終にスペクテートア二百九十一號の批評論となれり。阿諛諂言は極めて作り易く戲謔嘲弄も又爲し易し、余は女學記者の如く今の批評家が局量狹き（假りに記者の說に隨て）を見ずして或は批評を嘲弄の道具と心得て小瑕瑾を索し出すを得意とし或は無理に缺點を構造して笑謔の種子とするを憂ふ。然れども是等は猶ほ憂ふるに足らず、唯だ彼の眞摯なる批評家を以て任ずる人にして細密に涉らざる——寧ろ寛大に失する批評あるを怪しむ。例ば國民之友五十七號に「唐松操」を評したる高橋五郎氏の言に＝小說として一點の非難すべき處なく一句の增減すべき處なきが如し＝とあり、又五十三號に「堀出し物」を評したる椿夢樓主人は些々たる作者曰を喋々して然も肯綮に中らざる言を並べ、又學海居士は今日批評家の先進と曰はるゝ人なるに三十九號及四十一號に載せられし蝴蝶と細君の二評は何れも枝葉を論じて其精神に及ばず。是等の錚々たる批評家すら斯く疎鹵の評をなすなれば他は知るべきのみ。余の常に怪んで且今の批評の文界に益なしと考ふる點は則ち此疎鹵にあり。然るに此疎鹵なりと余の考ふる批評を猶ほ究屈なりと云ふ女學記者こそ不審なりと思ひしに、果せる哉女學雜誌五十四號に明治毒婦傳の評あり、曰く、

「（上畧）吾人今之れを再讀して轉た痛嘆に堪へざるものは女性の優質變じて非常の猛惡となるべき所以を悟るが故なり（中畧）又一讀して正當の女敎となすものにあらずと雖も非常の惡虐も最初は只僅かなる不身持より生じ來る所以を觀て反省せば又以て女戒の一端となすべき也」

彼の毒婦傳は余も是を一讀したり、著作者は元より高尚の理想もなく爲永亞流と相遠からざる頭腦を以て著はしたるなれ

ば時には淫猥にして讀むを厭ふの邊もあり、又讀者を其中に引込まんとする處少からず、殊には平生記者が最も嫌ふべき筈なる卑劣の醜情をも描きたる處多きに夫すら＝反省せば又以て女戒の一端となすべき也＝と最も寛大なる批評を下したり。もし明治の文學にして如此き批評を以て滿足せば文界の事業は頗る容易なれど、記者はかく寛大なる評こそ文學を益すべし後進の發達を勵ますべしと信ぜらるゝや。

竊かに記者が本論と答辨とを以て察するに前に述べたる外になき樣なれど、如何に其說辯するともかゝる思慮なき言を吐かるゝ記者にはあらじ。細密なる批評あつて名譽なる文學を生ずる理は誰一人として否とするもののなきに如何に千古に超出する卓見を抱かるゝも細密なる批評は文學に害ありと曰はるゝ筈なし。「くされ玉子」の世に出るや記者は忽ち曰く、

「（上略）實を寫す事元より美術の一方なり、然れども只目的もなく否な尤も惡むべきの目的を以て特更に人の臟腑を暴くは抑も高尙なる文學者の敢て爲すべき事なる乎、當今の文壇堂々として如此き毒筆の橫行するを見る我が國運の爲に慷歎せざるべからず。「都之花」にして若し斯の如くば今後良家の淑女は决して之を讀むべからず、良家の父兄は斷じて之を戶内に入らしむる可からず。」

夫れ一讀して作者の目的の惡むべきを知り、半頁にも足らざる文字の爲に「くされ玉子」全躰を退け、又「くされ玉子」一篇の爲に「都之花」全冊を退け＝良家の淑女は讀むべからず＝と勸告す。記者が謹嚴如此にして一言一句をも忽かにせざるは文學を稗益するは勿論なれど、「小說論略」筆者たる記者は是を小說界を究屈にするとて叱責せられざるや。

余は常に今の文學界に最も嚴格にして且細密なる批評の出でん事を願ひ、今の批評は大抵皮相に泥み極めて疎鹵なる事恰かもまぐろ網の如く到底海底の眞珠をすくひ得ざるを歎じ、ラ、ハープの如きグーチの如きハズリットの如き慧眼なる批評家を密かに望みたりき。アヂソン甞て曰く、

「（上略）書籍の完全なる嗜好を持つ人は古今の批評文を讀事大切なり、余も又僅小の嗜好ある人もなほ論議すべき器械的の規則の外に書物の唯中なる精神に浸入し且其傑作が心を樂ましむる原因を明示する批評家のありしを願ふ。かゝれば詩を評するに年時場所及行爲の一致を論ずるは必要なれども美術には想像を起し又驚かし、讀者に心の高尙を與ふる根原あつて存するをロンギナスの外是を考へしもの

殆んどなし」云々。

今の批評家はアヂソンが器械的の規則を笑ひし事だに知らずして極めて疎鹵に流るゝを如何せん。余は批評文を好めばあまねく新聞雜誌の批評を讀む毎に此歎なき能はず、縱令ペントレイがミルトンの失樂園詩に於ける如くなくとも少しは精細にわりたしと居常人にも語りし事度々なりしに、今に於て此疎鹵なる批評が狹量にして大に小說界を究屈にすと嚴正なる女學記者が曰はんとは思はざりき。

余はリアルをもアイデアルをも共奉ずる人々互に相唱道する事を欲す、女學記者の如く放膽的に論議するは文學に冷淡なる人々の喜ぶ處にして同じく偏癖の人たるを脫せず。

前の辨難は末葉に涉れりとて記者に叱責せられたれば更に精神に就て疑ふ處を述ぶ、些々たる末葉は爰に曰はず。不才唯記者が眞意を誤まりたるを恐る、乞ふ再教を惠め。

〇謹んで龍背に申す　　故の小說論略筆者

拜答、最早や論外に涉り來りたれば、只だ御厚意を謝する迄でに一二の答を呈し、他は全く省く、此上は局外の讀者に公平なる判斷を仰ぐの外なし。

批評は成るべく精密なるべし、此事は至極同論にして毛頭反對したるとなし、故に云く批評眼はいよ〱細かく見、益々深く觀察すべしと、然れども狹く見よとは云はず。局量の狹き批評と細密なる批評との相ひ逢ふは言ふ迄もなし。

實事物語の小說にあらずと思はるゝよしは、最初の小說說畧に於ても辨じたり、蓋し余れ實事物語の小說にあらざるを信ずるが故に、小說に理想實際の別なしとは云ふのみ。

批評に於ては寬大と云ふとなし、批評の寬大なるものは寧しろ不十分の批評なるなり、余は固より之に感服せず。高橋君及び學海居士にして若し然りとせば余は之を歎ず、然れども此論に於て余の關する所ろに非ず。

抑そも細密に批評するは如何ほどにも細密なるべし、然れども小說の區域を畫小するの事は決して細密と稱すべきものにあらず、余は粗鹵なる批評を目しては粗鹵なりと云ふべし、小說の區域を極めて小さくするを以て之を細密の批評なりと信ずる能はず。此闘密なり、粗なりと評するは願はし「此れ繪に非ず」と斷言するは甚はば寬大なれと云ふ已。

然ども此は專ら智性の上に付て云のみ、道德の上に至ては限制の甚だ嚴そかならんを希願ふ、彼智力の發達に至ては、步程駸々として前途未だ知る可らず余輩偶ほ其正鵠をだに知ら

ざる也、但だ夫れ道德の事に至つては仁不仁の二途に出でず、而して不仁の善ならざるは極めて明白なるが故に、凡そ見て不仁となすべきの文章事物は斷然として之を制止せざる可らず。松蘿堂主人、余を以て或は廣しとし或は狹しとなす、若し余が智性の界に於て甚はだ寛量に、道德の境に於て尤も嚴密ならんと欲するの情を知ろし召さば、必らずしも余を目して矛盾の言を吐くとは爲されじ。

余は今に至るも「くされ玉子」の末段を惡む、故に都の花にして若し如此き文字を掲ぐるとを止めずんば良家の子女決して之を讀む可らずと勸告すると依然元の如し、然るに余が此言を以て濫りに他を罵詈すと云ふものあらば、其人或は文學者たるべし、未だ敎育家たらざる也。

主人は余が問ふ所ろに對して一言を答へず、特にリアル、アイデアルの別に至つては毫も辨ずる所ろなし、只だ云く若し偏して一方を偏重せば不可なり、只だ奉ずる所ろに準據して說を立つる何の不思議あらん、又云くたとひ記者は滿足せざるも客觀主觀の區別を立てアイデアルとリアルを別つものもあるべしと、此等の言何を以て理想派實際派に明別あるとを證するに足らんや、嗚呼余は事物を觀察し論究するに主觀客觀の別ちあるを知る、然れども此は只だ其論じ方、見方の內外に偏したるを云ふのみ敢て其論了し見了したる事物の客觀物となり主觀物となるを云ふにあらず、昔しは科學を以て客觀的となし、哲學を以て主觀物としたり、然れども今は如此き唯一の方法によりて事物を研窮しがたしと爲せり、然るを況んや既に結構したる小說に於て純然たる理想派あり、純然たる實際派なるものあらんや、若し必らずこれありと云はゞ寧しろたゞ理想的の一ありとこそ云はめ、此時に於て反つて實際派をのみ重んぜんとす誤謬いよ〳〵甚はだし。

愚考する所ろ大略如此し、故に呈答する所の畧亦た以上の如し、敬白。

(98)○日本赤十字社篤志看護婦人會敎程　中本一册二百廿一頁定價卅五錢　發行所府下日本橋馬喰町島村方

此書は日本赤十字社看護婦人會の爲めに講師足立寛氏が講述せられたるものにして、全卷を三敎に分ち、第一敎には看護法、治療介輔の二章を置きて之を三十二節に分說し、第二敎には人身造構及び官能、傳染病、日常多き病の三章を置きて之を二十一節に分述し、第三敎には外傷、急症救助法の二章を置きて之を十三節に細論し、圖畫を精細に、文章を平易に注意を謹密にして、時に臨み惣べての看護法を實行し得る樣

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

極めて親切に敎述したり、元來看護法は醫術中最要の一科たる上に、更らに婦女子に適するの仁術蓋し之に過たるもの少なきほどなれば、凡そ女性は勉めて之を修練し、たとひ居常錦繡を着くるの身柄と云へども、之を万一の爲めに習らひ置くと甚だ大切なり、然るに從來之を平易に敎示するの書乏しく、偶たま女學校にて此如き科を設置せんとするにも、其敎科書なきに困却したることあるが、今や此の完全に近き良書を得て益する所ろ甚だ多し。

雜録

○安んずる處ろ　　しのぶ

水は流れて止まず、然れども低き所ろに到れば止まる、風は吹きて靜かならず、然れども氣滿る所ろに到れば治まる、彼の鳥の飛ぶを見よ其宿るべき巢あるにあらずや、鹿のさびしく鳴くを聞けよ息ふべき峰あるにあらずや、虫も露を飲み了れば眠り、草も花を開けば根を藏む、思ふに何物か所ろを得ずして煩らふことあらん、聖人曰く、天の鳥を見よ、野の百合花を見よと、吾等其聲を聞きて倘ほ安きを得ず終生忙々す、嗚呼人世果して如此きを常とするか、何んぞ夫れ然らん。

○英雄何處にある　　かすみ

天下何の處ろに英雄ありや、仰いで山岳を見れば甚だ高し、俯して洋海を見れば極めて廣ろし、若し夫れ一天青雲を擴ぐるに於ては蒼々として數億万里眼界の達する所ろにあらず、而して其高きと更らに數億万倍すと、此時に於て眇乎たる一人間あり、長城を築き、列國を從へ、群臣中に睥睨大言し、云く吾れ英雄なりと、山は微笑し、川は嘲けり、鳥は歌ふ、天地の廣大なるを如何んせんと。

○演說者及び令夫人　　是空子

一名士新富座の大演說會に出席して歸る、フロックコート泥に塗みれ、カラ、カフ血に混じ、帽子へこみ、髯頭に土を附けたり。細君喫驚して問ふて曰く、吾が最愛する所ろの良人よ、今日抑そも何如になし玉ひしや、定めし十二分の御殊美にてましませしならん。良人叱して曰く、政治上の事は婦女子の與かり知る所にあらず。

○野菊　　しづ

みよ　およしさんどこへ行て入しやいましたオヤ大そうきれいなボケイ（花たば）だこと

よし　エーアノけふはたまのお休ですから本牧のほうへ散步に

行ましたの此花ハチ道ばたのをつみ〳〵たばにしたんですがチヨツトごらんなさいよ此野ぎくの中に外のよりめだつて花輪の大きいのがありませう、そしてぢくのふといとチイ。

みよ　ドレ〳〵ほんにマアそして可愛いゝつぼみが三ッくつゝいてゐますのチイそれハそうとおよしさんハなぜそんなにぢつと考へてゐらつしやるの。

よし　だつて此花がひどく私の感情を刺激したんですものチ。

みよ　またおよしさんの慷慨が始まつてよ私にはチ此野菊の花ハ可愛らしい子供を三人引連たおつかさんの様にみえますがあなたのお感情にはどふ訴へました。

よし　おみよさんハごじぶんがSweetだもんだから物事みんなかわいら敷みえるのですしかしごらんなさいよあなたが慈母のまわりに群れゐると想像なさつたこのつぼみは此大花にみんな勢分を吸取られてこれよりハ發達が出來ないのですこのとふりに壓れていぢけて仕舞うのです母ならば子供の爲に身を犧牲にする者さへありますがこれとハ大した相違ですは。

みよ　アヽ優勝劣敗のことといつてゐらつしやるの?。

よし　優勝劣敗といへばあなた天地間の事物に冷たい道理をつけて見たんですけれど此はなは私には世の中の弱いものをかてに腹をこやす憎むべきtyrantや柔順な妻子をくるしめて豪然とかまへてゐる卑劣な男子を思ひ出させますはマアよく考てごらんなさいよ此大花の様な人間の爲に壓れておびやかされて此しなびたつぼみのやうに天性の自由ものびず一生の幸福をむざ〳〵と失しなつてしまふものが幾らございませう、そこで私どもは博い愛の行なわれる様に、そういふ家ぞく内の壓制家を根だやしする様によほど覺悟しないじやなりませんチ私ハこの花はこふしてしまいたい(はなを手ばやにむしる)。

みよ　アラお考は敬服ですが野菊には罪ハありませんのにさ。

○動物を虐待す可らず　フランセス、パワー、コツブ女史

動物に信切を盡くすと云ふとは是迄て人々一種の嗜なみの如くに敎へられ、斯くあるときは何んとなく温和しやかに見へ、惠みある如く見へ、甚ハだ優長に見ゆるの故を以て扨て動物に信切なれよとは敎へられたり、故に此の心得は必らずしも人徳に必要の事なりとは思はれず、寧しろ常徳に超えたる飾りの心得方の如くに思ハれたりしなり、故に彼の花を賞し繪畫を鑑定するの趣味の如く、たゞ高等優雅なる紳士淑女のみの誇るべき仁惠ありと見做されたり。

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

思ふに如此きは大いある過ちにして、たとへば盗みたるは見榮よろしからず、人を虐遇するは高尚らしくなしと云ひて之を戒ましむるが如し、如此き道德は其根底に於て誤まり居るものなり。

此に數人の兄弟ありとせよ、其母の居らざる間だに長じたる兄が其幼なき弟を酷どく取扱はゞ何如ん、不仁尤とも惡くむべきに非ずや、今ま人は万物の靈長と稱して多くの動物の上に位ひせり、左らば其造り主の見へざる間だと云へども、人間は即はち尤も信切に動物を遇すべきものにあらずや。

此故に動物とに家畜に信切あるとは正に人の義務也、たゞ其外形の宜しきに由りて惠みするにあらず、實に斯く爲さねばならざれば也、左れば母の其子に教ゆる當に如此にして敎示すべきもの也。

○月に對して

西恒太郎

秋の夜のふけゆくまゝに燈下讀み殘したる自由理を收めて靜かに南窓を打ち開けば七曜臺の澆波洋々として漁火稀なり月林間に宿りて落葉の風寂しく吹きすさぶ隣家玉笛を弄する聲斷腸又斷腸。

婦なく喚起す家鄉衰殘の嘆、思ひ倏ち到る國家前途の事、嗚呼月よ汝が照す日本國呼汝を吟ずる大和民族は諸外國に對して獨立對等の國權を有せずあはれ赤髯碧眼の爲めに天賦の權利を蹂躙せられたりされば我親愛なる同胞のたまたま外國に旅するもの皆其の法律に强從せしめらるゝも碧眼髯の我に在留するものなして我法律に從はしむること能はず、嗚呼月よ汝が照す彼等も人なり汝を吟ずる我々も亦人なり同じく人にしありながら同じく國さしありながら何爲れぞ彼にのみ篤くして我國のみ疎きや、時しもあれそよ吹く風に誘はれて月は雲間に笑顔を現し靜かに岳蓮を顧みて余に物言ふ者に似たり岳蓮の雪芳野の花秋津洲の風景おさく世界に冠たるものから如何せん民に獨立自重の氣象乏しく權威に媚び强剛に屈し世と共に流れ移り俗と同く浮きつ沈みつ政府の壓制は古來の習慣なりとて之に從ひ外人の跋跨は時勢の然らしむる處なりとて之を認め產業興らざれば民に菜色あり千里の沃野捨てゝ耕さんともせず四面の碧波捨てゝ漁らんともせず交通の便は開くるともその貿易に從事するの氣力すくなくなりたまたま教育の進歩なきにしもあらねど是とても文弱に流れ理想に馳するの傾あるのみ海に皇國を護るに足る水師なく陸に外寇に旭旗を揚ぐべき兵士なし我心は曇りなし我鏡は汝の國を照し亦彼國を照して曾て彼是の別を置くさにはあらねども優るものゝ勝ち劣るものゝ敗るゝは世の習はしの是非もなき事にこそあれ彼等が汝を輕蔑にし汝の國權を蹂躙するは是れぞ汝の足らざるがためなる汝それこれを思へよ大和男子よ今にして奮起せざれば汝の國土はゝてなく外人にや專領せられん汝の民族は赤髯の支配にや屬せられん視よ印度國視よ安南國彼等も余の曾て照し今も照すの國々なり彼等の風景は美し彼等の地味は豐かなるものから民に獨立持重の氣象なく自昇み自棄てもて行きて今日のありさまとなりけるにあらずや奮ひ起きよ奮ひ起きよと、是に於て余は思はずも月に向つて呼べり余は大和の族なるぞ今は日本國に住むものなるぞあはれ余は淵に沈める日本國を挽き濟はでやあるべき夢に迷へる大和民族を起し醒さでやあるべき余は實に自ら任じて斯民を泰山の安きに置き斯國を獨立の尊きに復さばや天の斯人を生ずる天の斯國を設くる何とて彼是の別あらん天の賦し給へる自由てふものは進んで之を取るに任すべし優勝てふ地位は安きを偸むもゝの占むべき所にあらず好し我任は重し我望は切なり嗚呼月よ汝が照す日本國、汝を吟ずる大和男子、此時月は早や西の林に隠れて吾が綠窗聞くや聞かずや答ふる音は遠寺の鐘の音、寒く搖られて墜る樹々の露、咽びて鳴くや秋の蟲、斷腸又斷腸。

○半口ならばせつかい

きさまは何處へ行く、今夜無じんがあるが是非とらねばならぬそこで不動樣へ百度まゐりに行。そんならよいまじないを

敎へてやらふ懷中へ杓子を入れてゆきやれ奇妙にあたる。これは行がたしと入れて行つたがあたらず。どふだあたつたであらふ。いんにやあたらぬ。ハテナいくらがけだ。二分むじんを半くちだ。エヽそんなら初手にさふ云つたがよいせつかいをやるものを。

○借りる時の閻魔顔

淺草の焰魔正月も十六日に雨が降り七月もふられ觀音へ金をかりに行く。觀音あひ給ひ金が何ほど入ります。三十兩かして下され。なるほど三十兩かしてやらふがなす時はきさまはどんな顔でなさつしやる。

○くらやみに車

ゆうべ牛を夢に見たがその癖大きいと云ふたらたといやふがないよい夢か判じて下され。これは好い夢じや長々とよい事がござらふそして大きいと云ふてどのくらひでざつた。マアたとへて曰はゞくらやみへくるまをつけたやふだ。

○さるとりのいはく

まつりの山車に酉が太鼓の上にとまつて居るのはどふしたわけじや。あれはむかし唐土でめでたい御代の時分太皷を出してをいて訴訟があれば其太皷をたゝくはづなれども太平にて誰一人訴へ出づるものがないから太皷にこけができ酉の遊び處となつた諫皷苔深ふして酉驚ろかざる目出たい事ゆへにつくつたものさ。そんならあの御幣を持つたさるは何じや。あれか、あれはナ……あれはその、それ酉驚ろかざるの申だ。

○半分はかけね

貴樣は江戸へあきないにござるさふだが油斷をさつしやるな何でも買ものをするとても二兩ならば一兩とをもわつしやれと敎へられ心得ましたと江戸へ下り物を買て見るにをそろしい掛直なりある米屋とちかづきになり時にお前の名は何と申します「六兵衛と申ます。よし／＼是も三郎兵衛であらふと思ひそしておすまひは「五間間ぐちでござります。これも二間半であらふと思ひそして幾人おくらしなされます「今はわし一人でござりますと聞て首をひねり「そんなら誰と半分づゝおすまひなさる。

○寅の年でなくて仕合

友だちよりあひ酒肴にてのみかけしに一人の男無性に肴を取つては喰ひ取つてはくひする故これ貴樣は何の年じや「おれかおれは戌の歳、それで大きにおちついた「ナゼ「もし虎ならばおいらもくはれやふ。

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY

史傳

○ルシー、ハッチンスン夫人の傳　田部武治

ルシー、ハッチンスン夫人は龍動城の尉官リチャアド、アスプレー君の女にして阿君は性慈惠才幹あり當時城中に禁錮せらるゝ者多くは政事上の犯罪人なれば才學地位兩ながら高きものありアスプレー夫人は能く彼等の疾病に侍して親切至らざる所なく獄中の人皆呼で母とあすに至れり後ち夫人は醫術を修め普く貧窶藥を賑ふと能はざるものを療せりルシーハッチンスンは生れて容姿艶麗資性鋭敏四歳の時既に能く書を讀む性亦勤勉嬉戯を好まず深く心を宗敎に潜め幼にして禮拜日毎に必ず家族を集めて之を誨へり。

元帥ジヨン　ハッチンスンは當時の俊髦にして威望甚隆なり職にリッチモンドに在り時にアスプレー君は音樂を修めしめんとてルシーの妹を同所に寄寓せしめしにハッチンスン君深く之を愛し一日共に携へて母の家に到れり君適々書架を視て羅甸語の書籍あるを怪み此は誰に屬するやと問ひしに小女は是は我姉ルシーの書なりと由て始てルシーあるを知り詳に其資質を探りて頻に欽慕の情に堪へざりしも未だ相識の機あらざりし是より先き多く伉儷を求むるものあれどもルシー之を拒て容れざりしも父母の勸諭もあり遂にハッチンスン君に歸ぐとを承諾せり左れば世間の婦女子は往々斯の契約を羨みて嘖々せしものあれども元來ハッチンスン君のルシーを愛するは啻に容姿の精妍なるを以てに非ず誠に資性の同じきを以てなり既に結婚の日定りし頃ルシーは牛痘を病み容貌一變して觀るもの驚駭せざるはあし然れどもハッチンスン君のルシーを愛する更に渝るものあるを見ず疾癒るを待て儀式を擧げしが其頃は天質の美燦然として復た蔽ふべからざるに至れり。

結婚の後家を閑雅幽邃の勝地に卜し二年の間退隱して專ら心を文學に樂ましめ復た餘念なかりしが適々チャレス王及國會の間に爭を生じ革命の軍玆に始て其萌芽を發せり是よりハッチンスン君は國會黨に左袒して遂に其軍に從ふ尋でナチンガムの知事に推薦せらる當地人民兩派に分れ勤王國會數相半ばす加るに國會黨の要衝に當るを以て君大に苦心せり時にハッチンスン夫人は日夜心を竭して良人を奬勵し其志氣遂に能く全軍を震はしむ軍中病者あれば必ず自ら藥餌の勞を取り傷者には手から瘡痍を裹み敵も味方も同じく夫人の惠愛に感泣せざるはなかりしとぞ。

此時に當て國會黨にはハッチンスン夫人の豪勇なるあり勤王黨

にはフアンシエープ夫人の剛邁なるあり共に自れが信ずる所に從て正理の爲に鞠躬盡瘁するものなりと雖ども其執る所の主義に至りては全く相反す然れども其の豪勇信仰と強硬なるとに至りては凜乎として同じく千古を照すに足れり一時雨女傑を生ずると亦奇と謂べし斯くてハッチンスン君は始終能く此要害を守りて最も困難なる義務を全ふし遂に國會黨をして外寇內患の憂なからしめたり君功を以て國會議員中の重任に撰ばる。

英國の社會は既に維新して國會黨の勝利となりしも程なく人民は復た同黨の壓制を嫌厭し國王の復位を希望せしかばハッチンスン夫人は之を聞て大に恐怖して止まずハッチンスン君は懇ろに政府の變革は決して我等の身上に影響なきヿを諭せども更に之を容れず頻りに家を擧て他に退隱し以て害を避んヿを勸む既にして夫人は君の命を用ひざるのみならず君の名を署して議員の許に書を送り退隱のヿを請求せしかば國會は速に之を許して深く問はず唯終身官途に就くヿを禁じたり其後ハッチンスン君は一時捕はれて龍動城に幽閉せらる妻孥獨り留められて城に入ることを得ざる幾旬既にして許されて訪問す夫人是より連日必らず良人の起居を候し嚴冬氷堅の夕も未だ嘗て怠らず十個月間の長き一日の如し其間夫人は自ら公廳に起て論辨良人の赦免を請求せしも事竟に成らず。

既にして君移されてサンダウン城に幽せらる瘴烟毒霧日夕地を蒸し加るに囚虜猛惡のもの多く殆ど玉石混淆の感に堪へず間もなく君大患に罹り病勢最急なり夫人衣帶を解かず專ら心を藥餌に用ゆ時にアレンアプスレー君の哀を請ふありて官特に君をして毎日一回緩歩海畔に徘徊し以て氣を養はしむ然れども君の病勢益 熾にして遂に斯の恩典も畫餠に屬したり加之 資用竭盡せしかば夫人は債を起すためにチウンルブに向て出立せり夫人は別に臨て竊に謂へらく我留守中に必ず粗漏なる待遇もやあらん亦如何にも寂寞に無聊なるヿならんと心常に良人の側を離れざれは務て良人を奬勵し一男を携へて途に上り一女を留て君を慰藉せしむ。

夫人去て後數日一日天氣淸朗風趣愛すべし君便ち幼女を携て共に海濱に散策せし折しも遽に冷氣肌膚を衝き痛楚身を措く所を知らず是より病益々篤く日々夫人の歸るを待ち遂に自ら書を送らんとす君平居未だ嘗て聖書を離さず燕居の時軍馬の間必ず之を誦す是に至て醫師は君の遂に起つべからざるヿを告げしかば君怡然として曰く我今にして神の御心を見る我れ

以て行くべし徐に家事を理し一封の遺書を作りて夫人に貽し且曰く能く吾妻に語れ彼女は通常の婦人に非ず去れば此際最も謹で平生真基督教徒たるに愧づるの行あると無ん言訖り從容として逝く。

憐むべし豪勇なる夫人は啻に最愛の良人に離るゝのみならず君が生前國事の爲に起せし負債に對しては償還の責任を負ひ遂にチウツルプの別墅を賣るに至れり内には則ち四男四女ありて教養の勞一方ならず然れども夫人は深く良人將死の辭を銘して忘れず必ず良人の意を全ふせんと欲し其の自ら警戒する所以のもの一に非ず特に良人が言行錄を編輯し永く以て子女を教訓せんとを期せり且つや夫人は深く其心常に良人と同棲するとを信じ決して相離るの感念なし蓋し尋常一般の夫妻即彼の唯一死以て痛く其分離を悲む如きものと大に其情を異にするあるを見るあり。

夫人學識才能衆に超ゆ然れども一朝妻たり母たるの職分を終る時には此等の技能も我に於ては何か有らんと杳然世を避るの趣あり蓋し齊家の德能く高遠なる理想と一致し燦然として千載の下を照すが如余未だハッチンスン夫人の如きものあるを見ざるなり。

小說

○お向ふの離れ

若松しづ

丁度わたしの十六の春、庭の楓がそろ〳〵めぐんで、福壽草も暮からお役を勤め上て、ゆつくり伸をすると云ふ時分向ふの伯母さんのうちから出入の呉服屋が色々持つて參りましたからお嬢さまに入しつて御覽なさいませんかと態々下女を以て言つてよこして下すつた事がありました、するとおつかさんがそんなら清やおまへ余處行の半ゑりが惡くなつて居たつけから鳥渡行て見ておいでといふ有がたいお許しが出てうれしく、そんならおつかさん行て參りますもそこ〳〵に、伯母の家へ一と走りに參りました。

伯母の家には丁度わたしたちの年格好のいとこが三人あつて皆んな元氣の好い遊びなかまでしたし夫れに私しが極く幼少の時分育てられた大事なおばあさんが其家の離れに隱居して入しやるので、始終出這入るを樂しみにして居ました。

此日の事に從妹三人とも彼の離れで、呉服屋の品物を八疊間一ぱいにひろげさせて、おもしろそうに擇り好みをして居ました、お祖母さんは片隅に坐つて麻をうんで入つしやいましたが、若いものが帯の色合、着物の縞柄をさま〴〵八釜しく品

定めするのを聞て居らしつて、若い時はア、も着物に夢中になるものだつたか知らん、と言ふやうな氣色で、折ふしにて〳〵しながら孫たちが、つまり自分の好み通りにするまでも、おばあさん之はどうでしやう、と相談を仕掛るのを緩つたりと眼がねの上から眺めて、うるさいとも仰しやらずに幾度となく一々返事をして入しやるのが、まだそこに見える樣に覺へて居升。

私しが這入つて行のを皆んなはあまり夢中の勢か、たれも氣が付かぬ樣子でしたが、暫らくすると私と同ない年の從妹が、チヤ淸ちやんいつ來たの、一寸と此帶御覽なさいよ、色合がたまらないじやありませんか、私しの紫じゆすの片かわチ、あれへ着やうと思ふんですよ、チイおつかさん買つてもいゝんですチ、アラ、だつて壽ちやんにもあの羽織地を買つてやつてさ、いゝのチイ?。

伯母は仕方が無いと云ふ調子でだまつて仕舞ひました、そして淸ちやんは何に買うの? エ、半ゑり? 、チヨツト呉服屋さん半ゑりですよ、アヽ其箱にいゝのがたんとあつてよ。ありがたうと私が會釋しながら襟の箱をおばあさんの入しやる方へ持て行て色々見て、とう〳〵、素鼠へ櫻をほんのりと染出したのをゑりぬいておばあさんにお見せ申すと、おばあさんが急に思ひ着いた樣にツゥ〳〵久や(これは伯母の名)私しにも一つ半襟を買て貰ひたいチイ、あの黒い絹ちゞみはモウ五年でしかけてあの通りだからチー。伯母はチヨツトこちらを振向いて、ア、そう、しかし新らしいのにも及び升まい、私しの幾らもかけないのが在升から、あれを上ませうと言ひ捨てゝ、向ふをむき、娘のとつた品物の直段を掛合て居升たが、其聲、其素風、私しには余程冷淡に考へられました。ア、此おばあさん、まだ家が左程工面がよくなく、今ほど活計に余裕がない時分おばあさんが伯母に花見の晴着が着せたい斗りに、そつと夜なべに人仕事をなさつた事があるとか小耳に挾んで居るわたし、今は富優な御身分、遠慮がちなおばあさんのお口から斯うしてくれとおつしやるなどは、二年に一度か三年に一度、めつたには無い、夫はお子供衆も多いとゆへ、定めし掛りも大抵ではあるまいとはお察し申したが、元〳〵半襟一つ、たとひあまり外出もなさらぬおばあさまの事だから掛ふるしでも惡るくないにせよ、大したものではなし、新らしいのを買つてお上なさつたらばとひどく殘念に思ひ升た。

此通りの思ひが心にある勢か、どふやら此の事がおつてから、矢張り靜かに癡をうんで入しつて、夫なり一と言も仰しやらないのですが、下を向いて入しやるお目がうるんで居る樣に見えて折ふし幽かに溜息をなさるかの樣に思われ升た、其お心には、ア、あのやうに此身も惜まず大事にかけて育てた娘、今はわり果まる身上で半襟一つ惜むかと正か思し召しはなさるまいが、マア私しなら直そう思ふと考へて、胸が一杯になり、いづそお母さんに申して私しの此半襟の代りにお望みのをと思ひましたが、イヤ〳〵そうしては反つて伯母へ對して失禮に當るだらうとやつと扣へて其日は呉服屋の歸らぬ先に暇を乞してもどりました。

すると其日からたしか二週間目位に、急に伯母の家に悲しい變事がありました、夫れは並み外れて御丈夫であつたおばあさんが、壯健なとしよりの僻として、もろくころつくりお隱れになつて仕舞つたのでした。

御送葬の時、潔白な御生涯の雛形かとも見られた眞白のおめしと見事な白りんずのお襟で靜かに永眠なさつて居るお姿を拜見するに付け、また先頃の半襟のことが端なく心に浮んで來ました。そう斯うして無事に御送葬も濟み漸やく日數も經て、おやさしいおばあさんを悲しみ思ふのも幾らか薄らいだ頃、ある夕べおばあさまが永らく隱居して入しつた離れが何んとなく切りに戀ひしくあり、そつと月あかりで勝手の知れた伯母の家の庭から彼の離れをのぞくと、お居間の道具は其まゝにしてあり、不斷おばあさまのお用ゐになつた箪笥も元のまゝに在つて、フト薄明りで内を窺ふとたんすの引だしを開て立つて居る人がありました。

耳を澄まして樣子を聞くと、忍び音に泣く聲がするので不審が晴れず能く〳〵すかして見ると、之は伯母が彼の色のさめたお伯母さんの半襟の掛つた襦袢を出して思ひ出し泣に泣て居るので、幾度かひづくり反しては泣き、仕舞には溜りかねた樣子で其襦袢の上へ突伏して正体なく泣沈んで居ました。伯母は私しの居るのを知らない樣でしたから、またソット、ぬき足して家に歸りましたが、マア私しはあのはん襟事件では、本に鬼の樣に思ふた伯母、矢張り大事なおばあさんに決して不孝をするつもりでは無つたのでせう、今となつては、あの時なにを望ても、よし六かしい事にしろ仰しやる通りにして上げたら、今まの苦しみはなかつたらうに、詰らぬ物惜しみをして、掛がいのないお母さまにとんだ不孝をしたと、取

てかへしのならぬ後悔をして居るのでした。

皆さんさらばとて石に布團も着せられずです、孝行をなさるのを御送葬の時まで御猶豫なさりますな、年寄を喜ばすのは大して骨の折れるものではありません、私どもは赤子の中から育くみ育てうまなかつて今は衰ろへた手や、お御足をいたわり休め、亦私どもを何處までも愛して決して報酬を求めやうとしなかつた其心を、どふぞ終りまで慰さめ安んじたいでは御座りませんか。（讀切）

兒籃

○船長の話し（上）

小笹

千八百三十一年の二月の事でありました日は確かに覺えませんが月の光りがくまなく輝す夜の事で私が指揮して居ります滊船はある港に碇泊いたしましたそれは大層寒い晩でしたがその碇泊しました日より以前十一日の間は東北よりの激しき風を受けまして雪や雨雪を侵して實に困難な航海をいたしましたそれ故水夫等はみな勞れてもはや息すませねば益に立つようなものはありませんトテモこの上二日とは續きますまいと思ふ計りでした、私は飲みかけの煙草を呑み終るため暫時甲板へ出て私の相役に、

何とまあひどい寒さではありませんかラーキンさん……潮の流が大層強ひようですが流れ來る氷の塊が危いから確りと見張を願ひます。

相役はかしこまつたと答へました語を跡にして私は甲板を下りました軈て二時間もたちますと見張の役人は眠て居る私しを起しました私は何事かわざ〳〵起しに來るとは面倒な奴とは思ひましたがそうも云へず迷惑そうな顔をいたして居りますと役人は氣の毒そうに

折角御やすみなすつたを心なくお起し申したようで濟みませんが何卒早く甲板へ御出を願ひます……たつた今流れ來る氷の塊の上を見ますと黒いものが動いて居ります――

私は飛び起きました……夢中で……いつの間にか身は甲板の上に在りました相役のラーキンは氷の塊を指さしましたが成程氷の表には黒ひものが在ります。

雙眼鏡を　持て來て……ラーキンさん月が雲を離れたなら十分に見る事が出來ましようから、と申して居るうち月は雲間を離れますラーキンは眼鏡を持つて傍らに立て居ります月が全く雲を離れました時私は眼鏡を

取て見ました‥‥一寸と見た計りで‥‥たくさんです、それと云ふ間に小舟を下し始めましたその時私は思はず大聲に大變だ‥‥前の方に‥‥それ〳〵そこに。

ラーキンは私の捨た眼鏡を拾ひとりこれも一寸見ましたが大變だ‥‥かわいそうに。

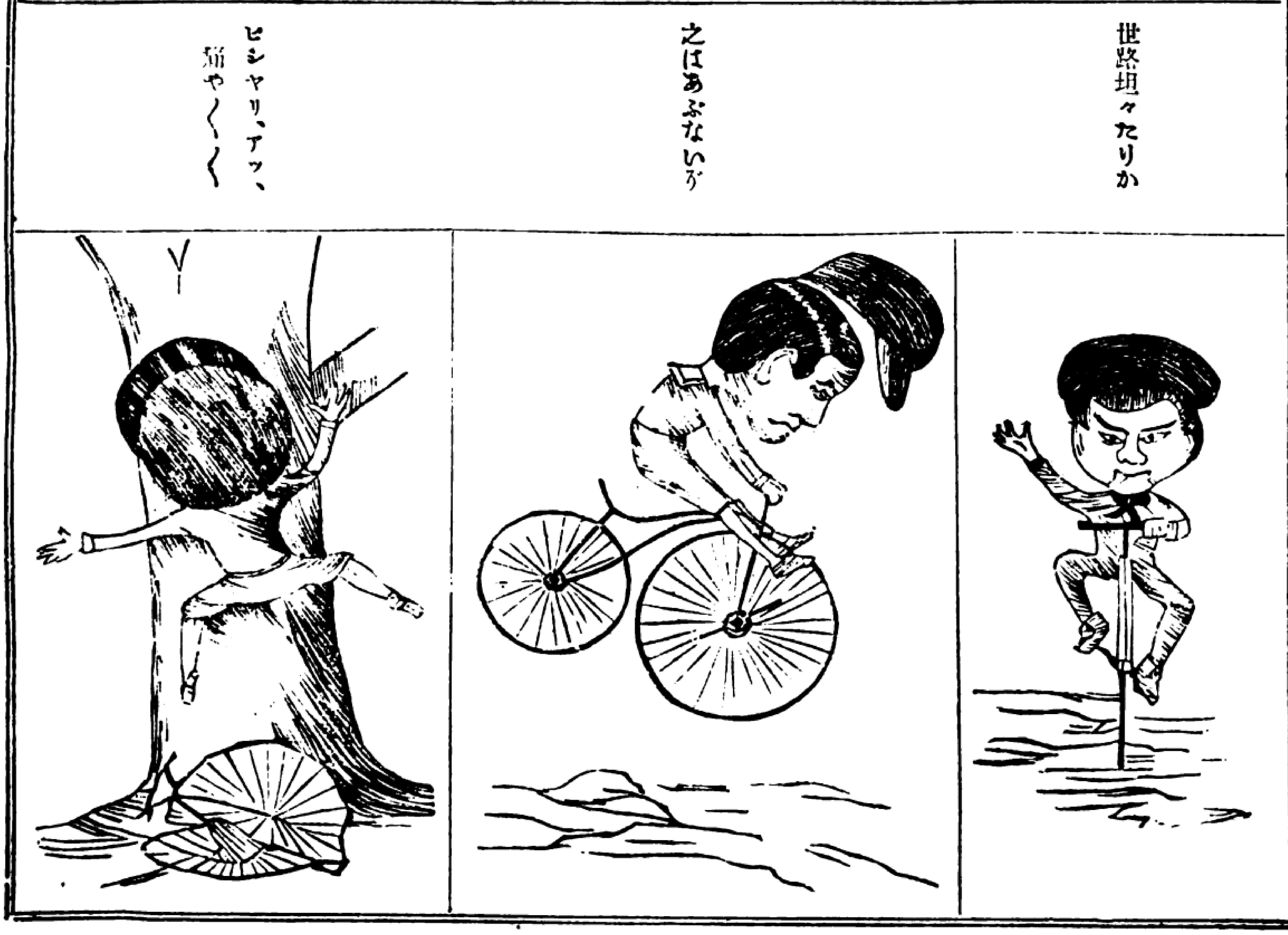
ト云つて私が下さんとして居る小舟を下す事の手傳ひをして呉れますその時ラーキンは口の內にて、氷の塊りの上には二人の小供が乘つて居るのだもの‥‥ア！可憐そうに。

寄書

○偶得　二則　　蝸牛廬　昨

漁村に在る數日我は俯の香のする、漁夫の家に訪ひ入り老翁少女と語る或は粗傲慓悍愛すべきを見る或は寒酸赤貧悲しむべきを見る女子に色作るものなく閭里に絃を彈するものなし𨻶伴得々として此中に彷徨し鯛を淺間山の下に釣り詩を浮島の岩頭に吟ず時に長風髮を梳つて鏡を要せず鮮血を啣つて朱唇燦めたる裸躰の銅像の如き強さ手を携へて行く甚だ趣味あり所得あり夜は荒屋に燈を剪つて一二の書を讀む意殊に暢然たり爰に於て初めて悟るくされ玉子の味。

嘗て都門の中に在りてくされ玉子を讀むに面白からぬ事非常なり人に逢ば即ち必らず其篇を罵り明治第一の悪文章となす今は即ち此篇を愛讀して明治第一の好文字となす蓋し人情皆然らん乎若夫れ世塵紛々たる所に在て讀まば厭ふべく嫌ふべき所以あり若夫れ蕭日蕭條たる山水の間にありて之を讀めば山水一段の淸氣を發して人の眉目に遍るを覺ふ村夫村婦一段の眞致を增して人の胸懷を洗はんとする如し嗚呼くされ玉子を懷中して人若し旅行せば必らず然らん然らば即ち此文章は朱引外の絕妙文字なり我自ら此文章を讀むべきの所を覺る樂んで後人に示す知ら



ず後人見て以て何となすた。

情變交傳奇も亦然り殊に此曲湊合奇巧にして然らざるべからざるの因緣中に作者の結構布置を寫し一點の無理なく萬世の情話を燕す僻鄕閑居して深夜閲し了り寂然と瞑目すれは世事歷々さ掌中の旄際雜葉を觀るに似たり是れ此曲細微にして世局を寫し出せるの微且つ眞なるにあらず此曲は是れ透明の水晶鏡にして此中より世局の大小是非看到り得ざるものなし。悲夫明治の文章家顯微鏡を作りて望遠鏡を作らず寫眞器に巧にして浮彫を爲さず我りヤルを尙ぶを悅んでアイデヤルを擯斥するの傾あるを忌む支那西洋の文人奉崇する所素より異なるへし而して文の妙處に到れば未だ大に異るを見ず座遇の一納鄧萇娟の瘢玉又孏の高共に絕奇にして至眞なり讀了りて淚を禁じ得ず臆笠翁は眞才子なる哉此人の書を讀むに僻鄕寂寞を感ぜず。

嵯峨の屋氏によりて山水の美を知り李翁によりて靜中雅妙を覩る是を閑中の偶得とす。

二 [illegible]

[illegible]

[redacted]

開書

拜啓仕候貴兄には未だ御面謁仕候事は無之候へども同志社卒業生にて越後の人三輪潤太郎氏とは此地にて懇意に相成此人より貴兄の事は承知致し且又私先年毎日新聞社に出入致し居り候節島田三郎君にも知人に相成候折柄昨春此地を經て歐洲へ御出の節にも談話兄の事に及び候へば一面識は無之候とも御名を存居り候。却說此度兄に申上候事は當地にて日本書生が會合しコンニヤク板の新聞の如き者を拵へ候事は從來澤山有之候へしが皆十枚か二十葉にて止め申候へども其内十九世紀と申は別紙の通り七十號餘も出來當地の日本人は皆知り居り申候へども私は職業多忙にて遂に此新聞を見たる事は無之候へしが一日風と手に當り候に付き讀み候處別紙の如き記事有之實にあきれ申候へども玆に私が考ひには日本人の癖として猥りに人をそしり得意と爲す者有之候へば此類とは存候へども併し全く無根の事にても斯る事を風聞する時は大に父母をして後來女子を學校へ入るゝに遲々たる如き事有之候ては誠に嘆かはしき事に候へば若し出來得る事に候はゝ東京各女學校の教員幷に幹事とも云ふ人御相談の上潔白なる事を世に公にし後來も益ゝ御注意有之候樣致し候はゝ如何に風說好きの者にても如何にも致し得べからざる事と存候私事は只今は一箇の職人にて實に自分の身さへ修むる事出來兼居り候者に候へば公けなる國の爲めに斯の如き言を爲すは何となく面白無之候へども餘り彼等の爲事にはあきれ申候間一寸兄に迄御知らせ申上候若し御參考にも相成候はゝ私の幸に御座候別紙は十九世紀に送り候書面の下書に候へども同社方は二周間經ても返事無之候又返事の爲す樣も無之者と思ひ申候而して此雜報中思ひ當る事あり云々の如きは何か思ひ當るやう全く如此事日本ﾀ新に參り候者は何も知らず皆ゝ如此事を申は常に御座候私も宗教の事には志は有之候へども誠に不案内にて諸兄の前には出られ不申候へども決して彼の如き言は爲し不申候右は亂筆御推讀被下度候猶ゝ我國の女學の事には御盡力被下度此段自重是祈候。私も最早四年此地に居り歸朝致さねばならぬ事有之候に付き歸り候はゝ御面會申上度候早々。

米桑港にて

鈴　木　金　松

一千八百八十九年九月十日

日本にて

巖本善治樣

前略貴社御發の第十九世紀と題する去月廿六日發兌の本國時事欄内〇婦德の壞亂の項同記者に御問合申度儀有之候間左に私の疑點を申述候に付き甚だ御多忙の處恐入候得共御回答奉仰度候。

其文中高等女學校の風俗攪亂を慨き其他の女學校も同一樣なりとし其例を揭げ櫻井女學校を始め其他三四の女學校の生徒等最寄の男學校生徒と會合する爲め最寄の教會堂に集り云々此等の人々は耶蘇の教會堂を私通野合の場所と爲す云々其他數多の語あるも之れを要するに或る人の風聞を聞き之れを記者が慨嘆して種々の言語を添加たるものと存候。

記者自身も全く斯くあるか否らざるやは半信半疑の間にあるものと見せ其文中若〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇しこれを以て事實ならしめば云々の語あれば此事全く事實なりとはせざるなり私事は平生諸君と同く我國の風俗の惡きを嘆くものに御座候而るに賴母しげに先輩諸子が女學校を設け其矯正に盡力するを乍陰喜び居り候處貴紙を見て誠に嘆息に堪へず候依て此風聞は果して事實なりや否やを知り得る丈け之を聞き取り若しも事實なりとせば如何にもして出來得る丈け之れが矯正に盡力するは誠に愛國の本意と存候間貴社は何人より之の話を聞きしか御差支無之候はゝ御示し被下度候。

終りに記者にも申上度とは其文中に記者は基督信者に非らざるとて餘り輕薄に同信者を評言したるの一事に候當米國の男女は基督を利用して情婦情夫の野合を紹介すると看破せられたれども此の話は日本より新來の御人は皆々此桑港の風俗を見只管其男女手を携ひて寺院へ參るを以て左樣には無之やとの推察し此の言を爲すもの多く候得共之れとて誠に其人の管見にして全く基督教徒を看破したるの言とは存じられず候之れを要するに記者は他人の說を借りて自分の臆測を輕々に評過したるにはあらざるか。

前縷々述べ候得共私の願意は左の點に有之候間再び揭け申候。

一　此風聞は何れより御聞きなされ候や差支無之候はゝ其出處を御開せ被下度候事。

若し御差支有之御漏無之候はゝ全く茲に風聞も有之候は記者御自身の記事と同思致し其積りにて手配可仕候。

二　記者は全く愛國忠誠の人に候はゞ今少しく考案を高尚にし只人を輕評し宗教を管見する等のとは御氣を付けられては如何かとの御忠告。

前項は何卒早々御返事を仰き度候早々謹言貴社の盛榮を祈り候。

西歷一千八百八十九年

一月九日　鈴木金松

第十九世紀新聞社御中

答書

拜答、合送ありし十九世紀新聞に載せたるものを見るに此は六月十九日の東海新報(千葉)に豈に高等女學校のみならんやと題して掲載したるを粹鈔したるものに有之候、此事全く無根の虛報にして甚はだしき捏造に成るものなれば、櫻井女學校明治女學校東洋英和女學校の三校長は連署して同新報を訴出したり、然るに之に先だち同新報社主板倉中氏より種々の謝辭を呈し必竟二回の正誤文を載せたる程の處ろ尚ほ十分ならずとして第三回の正誤文は三校長之を閲し而して後ち八月八日の同新報紙上に「既往に鑑みて將來を戒しむべし」と云へる一篇の大正誤文を揭げ大ひに同編者の疎忽なりしとを謝したる次第に候、故に當時の女學雜誌にも其顚末を記して公報したる如く此事全く虛聞に屬し毛頭無之、蓋し高等女學校の醜聞評判よりして種々に流言したるもの若くは虛構したるものに候、而して高等女學校に關する流言の如きも全く無根の事なる由は女學雜誌が最初より信じ且つ報道したる處ろに候、但し其事に付ては近日矢田部校長より改進新聞に對する訴訟可有之、其判決あるの日に至れば一層明白となるべく存じ候。

虛報流言の害實に恐るべし啻に內に國人を難ますのみならず斯迄に國辱を海外に暴さんとす、幸に足下の如き人ありて只だ之を救ふのみに候、敬白

巖本善治

新報

○人物論

朝に奇才ありと云へば安んぞ野に遺賢なからんやと云ふ、何れも尤もなり。然れども此れ迄の時勢に就て云はゞ野に働らき場所少なく朝に乘ずべきの機多し、人才の多く朝に流れたるも固より明知すべし。但だ夫れ如此き場合に於て特に野に遺るものは大ひなる原動者たるべし、其名決して天下に聞えざるとなく、而して其聞ゆるとの甚はだ少なきときは遺賢多からずと云はざる可らず。昔しは人を尋ぬるに三顧を要しぬ、今は車店の八公すら郵便にて音信するを得べし、今に於て朝に人物あり野に人物ありと云つて相爭ふは、寧ろ現今の朝野に著名なる人物を批評し對較するに若かず。然れども此に大ひなる明證あり、即はち必らずや朝に其大才あるなくして獨り野に於て特に其人才あるの明證あり、乞ふ見よ、朝に女性の官はなきにあらずや。

○婦人傍聽者

婦人の傍聽には傍聽料を要せずと云ふと寧しろ失敬なり、然れども之を優待するが爲め也と云はゞ夫にてよし、去る三日間新富座の大演說會に於て婦人の傍聽したるもの中々に多かりき、彼等はノウともヒヤとも叫ばざりき、況んや下駄を投ること草履を放る如きとは毛頭爲さゞりき、然れども彼等が一顰一笑は至大なる勢力を以て辯士の演說を可否するに足る、向后ますく左樣の形勢と爲らん、故に或る類の演說には矢張り傍聽料を取る方が其當の益となるともあらん。

○文學者の墮落

明治文壇の一雄將は女郎屋の主人と共に郞屋に繫がるゝに至り、理想想像國に遊泳すべき小說家は詐僞取財の嫌疑を以て拘引せられ、堂々として國事を論ずるもの遊里に沈溺し、筆を揮ふの力ら金重によりて動かざるもの比々として多し。嗚呼高尚潔白天に達する女秀才の鐵筆何處にありや。

○女性は買物の長者なり

と思へども、十月二日の東京新報が左の如く報じたるとにして眞なりとせば、斯る買物は餘り値切らぬとを可とす、家政學の心得として女生諸君に示す、

其の差二萬五千餘圓　兵庫縣知事夫人への待賓館拂下に關しては嘗て本紙上にも掲載したる所なるが今又聞く處に依ば元來神戸榮町通一丁目なる待賓館は去る明治四年頃京都の小野組が數萬圓の工費を投じて建築し私立銀行に充てたる家屋にして敷地は七百六十二坪あり其の建物は西洋造りもあり日本風の家屋もあり建坪百八十二坪一合二勺にして都合五棟の建物あり鐵柵の門あり鐵柵の外郭あり家屋及び倉庫の如きも皆な頗ぶる堅牢に且つ頗ぶる立派にして本宅の煉瓦造りは悉くセメントにて塗り內部の壁ゝは銅板を張詰め土中には金庫の設けあり金庫の周圍も數間の間はセメントにて堅め倉庫も總てセメントにて堅めたる得難き構造なるを以て從來如何なる暴風雨に會ても少しも破損せし事なき位なりしにその後小野組の失敗せし以來右の地所及び家屋等は官有に歸し待賓館と成りたり然るに昨年八月頃のことなりし兵庫縣知事內海忠勝氏の妻千代子は右の地所及び家屋を僅かに四千〇十五圓七十五錢の代價にて買取りたるにぞ當時彼れ是れ物議起り遂に又元價にて內務省へ買戻され去る廿五日改めて入札拂に附し宅地の中央なる小路を境界とし其の東の分と西の分とに兩分して入札せしめたる處但馬國朝來郡新井村の市川忠誠氏は東の分丈を二萬四千百四十一圓五十錢に入札し神戸榮町五丁目の小川七五郎氏は西の分丈を五千五百九十四

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

に入札したりと云ふ右に付き內務省は內海千代子へ拂ひ下げたる時よりも差引二萬五千七百十五圓七十五錢丈け高價に拂ひ多くの代金を得たる割なりと。

○大日本進德會

大日本進德會は規約に依り第二回總集會を去月二十八日午後二時より日本橋區鐵砲町八番地洋日商會なる本會員淺田氏の樓上に開きたり當日出席會員男女三十餘名外に參會者數人あり定めの時間に至り北原文治氏先づ立て開會の辭を陳べ次に第一高等中學校教員の宇田川一瀬兩氏の講話帝國大學法科大學生會員畑莫太郎氏の演說あり次に北原氏一年間の報告及び會計の報告あり次に高遠支會よりの諮問及び岩手縣會員よりの飮酒喫烟に就て本會採る所の主義如何の質義等に附て種々の討議あり次に規約上修正を加へ度との會員發議に就て議事を開き右了て小梅村支會員西澤喜四郞氏の同支會設立の實況及び同氏の本會員に望むと云ふ尤も壯快雄勵の談話あり其間茶菓の饗應ありて最後に北原氏閉會の辭を述べ當日の會を散ぜられしは殆んど點燈の頃なりき當年期間入會者の數は男女八十五名退會者二十名及び支會の設立十箇所あり目下在京會員は帝國大學第一高等中學校高等商學校高等女學校慶應義塾の學生及び府下商工業の實業家ありて會中の事務も次第整頓し現今稍々會運の進步を現せり。（會員報告）

宀　と

○慈善會　本年開會さるべき婦人慈善會は內山下町なる鹿鳴館に於て來る十一月十四、十五、十六の三日間施行さるゝよし。

○日本赤十字社の看護婦人會　は暑中休會のところ今二日より發會するよしにて本年中の日割幹事等は左の如しと因みに記す目下同會員は百零二人にして追々增加の見込あるよし（赤十字社報告による）

日本赤十字社篤志看護婦人會日表

廿二年　自十月至十二月

月	日	會日	刻限	月番幹事	幹事補
十月	二日	第一	水曜日 午前十時開講	侯爵鍋島直大夫人栄子	陸軍軍醫監石阪惟寛室道子
	十六日	第三		子爵仁禮景範夫人寿賀子	同一等軍醫正足立寛室小藤子
十一月	六日	第一		末松謙澄室伊藤生子	同非職二等軍醫正兼笹室
	廿日	第三		子爵清岡公張夫人昆子	醫學士山上正胤妻千代子
十二月	四日	第一		子爵櫻井忠興夫人錦子	安藤信子
	十八日	第三		公爵三條實美令嬢智惠子	桑田衛平妻貞子

○結婚期　去る廿六日內務省に於て中央衛生會を開き豫て司法大臣より民法編纂參考の爲め諮問されし我國結婚期に關して會議ありしが同會の決議は結婚早期は男十七歲女十五歲を以て適當と認定せしと云ふ。

○大日本婦人俱樂部設立の計畫　芝區南佐久間町二丁目の私立女子中學校々主伊藤初代氏の發起にて今回大日本婦人俱樂部なるものを設立し以て學術技藝の交換其他女子將來に關する一切の事項を協議し且品行の矯正を謀らんとて目下夫々計畫中なりと云ふ。

○私立女學校設立の計畫　目下教育上に從事する有志者は富山市に於て一の私立女學校を創立して今一層女子の教育を進步せしめんとの計畫ありしに富山縣學務課に於ても此擧を賛成し目下其方法を協議中なりと同校設立の趣意なりと云ふを聞に高等小學を卒業したる女子は尋常師範學校に入るの外他に高等の教育を受るの途なきに因り尋常中學に擬模したる女學校を設けて高等小學以上の教育を受けしめんと云ふにありとの風說なり。（富山縣菊池敏雄氏報）

○女工を印刷業に從事せしむ　大藏省印刷局にては是迄諸印刷器械は男工をして從事せしめしが先頃改革と共に大に職工を減ぜしを以て此頃に至り試に蒸氣力を用ゆる印刷器械を女工に從事せしめたる處其仕事向き緻密なるに經濟上男子に勝る處多くあれば以來は女工を多く使用する事になりしと云ふ（十月二日東京新報）

○娼妓賦金全廢願　東京府會にて娼妓の賦金を全廢せしより各縣下にも影響し愛知、三重、靜岡、岐阜四縣下の貸座敷營業人は聯合して廢止を其の筋へ請願せんと橫濱の同業者相談ありしところ橫濱にては聯合の必要無しとて同地の營業者のみ獨立して縣廳へ請願書を差出したるより忽ち同縣下各地の貸座敷へ波及し各所より續々請願にも及はん勢ひなりしが昨日議論に及ばれ難き旨指令ありし由。（九月二十七日朝野新聞）

○工女敎師百名餘　福岡縣下久留米市は織機の盛んなるとは遍く人の知る處ろなるが各郡とも追々織機會社の興起するに連れ其技に熟練したる婦女子は四圓乃至八圓にて各郡に敎師として聘用され目下各郡に聘用され居る者は百二名の多きに至り居れりと。

Digitized by Google
Original from
COLUMBIA UNIVERSITY

經濟雜誌社編輯　編輯主裁　田口卯吉　川上廣樹

日本社會事彙

第一回豫約者募集廣告

此書ハ國初ヨリ明治ノ今日マデ政治制度法律理財商業工藝風俗等百般ノ沿革ヲ統記シ頭學ヲ五十音ニ分チ索引ニ便ナラシメ且圖書ノ今日ニ存スルモノ大約之ヲ挿入スベシ其躰裁見本ニ見ハスガ如シ（見本御入用ノ方ハ郵券貳錢御送付アルベシ）○紙數半紙形大約四千頁之ヲ二卷ニ分チ第一卷ヲ明年七月中ニ第二卷ヲ十一月中ニ發兌シテ完了スベシ○定價拾六圓ニシテ豫約價次ノ如シ（但各地送本料ハ別ニ請求ス）、本年十一月中ニ一時入金ノモノ九圓、本年十一月中ニ半額明年七月中ニ半額ヲ入ルヽモノ拾壹圓、本年十一月ヨリ明年十月マデ毎月壹圓宛入金ノモノ拾貳圓○豫約申込期限ハ本月卅一日迄トス○大方ノ諸君賛成加盟アランコトヲ請フ

明治廿二年十月

東京市京橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

●第拾期唱歌教員速成科會員募集

●（學科）唱歌、理論、風琴奏法、
●（程度）文部省唱歌集初篇、二篇、幼稚園、
●（期限）四ケ月　明治二十二年十一月一日始業　明治二十三年二月廿八日卒業
●（定員）二十名（男女ニ拘ラズ）
●（教師）鳥居忱
●（備考）明治廿二年十一月廿八日音聲試驗ノ上定員限リ入會ヲ許ス●細則御入用ノ方ハ郵券二錢御送附アルヘシ

東京府神田區北神保町七番地

明治廿二年十月

東京唱歌會

交詢案內

（催促する勿れ　郵券十錢送れ　委細に申來れ）

●雇ひたき方　（甲）

十二	下婢	年齢廿歲ヵ五十歲迄の基督信者を雇入度者あり
十六	召使	重に小供の世話及裁縫等にして家事の手助けとなるべき年少の女子を雇ひたき所あり但官員の御內なり
二〇	取締	基督教信徒にて年齢三四十才なる獨身の婦人にして女學校ヨ寄宿し寄宿生徒の世話を爲し得る者を備入れ度處あり但し算筆並に日本裁縫に心得ある者
二一	中働	年齢廿五才にして一ト通り裁縫の出來るものを一圓以上の給金にて雇ひ度處あり

Digitized by Google　Original from COLUMBIA UNIVERSITY

遞信省認可

震災水害救恤義捐會廣告

本月五日午後六時より京橋區木挽町厚生館に於て各地方水害震災救恤の爲め義捐會（演說、音樂、劍舞、等大約左の順序を以て）相開候間有志の紳士淑女諸君幸に御來會の榮を賜へ

演說……………………島田三郎君
音樂 歐洲樂合奏……………盲啞學校生徒
バイヲリン淸樂合奏……………山勢松韻
劍舞 琴チニツン拔刀隊進擊……………少年三人
曾我……………吉永孝策君

通券
特別席切符 代價金五十錢
並席切符 代價金廿五錢

右通券賣捌所は各新聞紙上に廣告すべし

十月 會主 東京婦人矯風會

婦女災害義捐金寄附者姓名

奈良縣へ
金壹圓 麻布區飯倉町 寺尾
熊本縣へ
金壹圓 同 同
各地へ
金壹圓 麹町區三番町 宇都宮多歌子
同拾錢 同 宇都宮桃枝子
同壹圓 本所區龜澤町一丁目 齋藤とめ子
小計四圓拾錢
合計金參拾六圓

發兌	定價	廣告
十月。五日 十二日 十九日 廿六日 十一月。二日 九日 十六日 廿三日 三十日 十二月。七日 十四日 廿一日 廿八日	一册。六錢 郵稅。五厘（但府內無郵稅） 十册。五十八錢郵稅。五錢（同前） 半年分 一圓四十三錢 府外は 一圓五十六錢 一年分 二圓六十錢 府外は 二圓八十六錢	特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む 一行（廿七字詰）一回 前金拾錢 同 三回以上 一割引 同 六回以上 二割引 十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京京橋區彌左衛門町殿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文齋堂○橫濱住吉町角田屋良○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入澤集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原緑町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十二年十月三日印刷
明治二十二年十月五日出版

發行所 東京京橋區日吉町八番地 女學雜誌社

編輯兼發行者 東京京橋區日吉町八番地寄留 嚴本善治

印刷者 東京芝區源助町十一番地寄留 森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.

"JOGAKU ZASSHI."

Price 6 *sen*. By post *yen* 1.56 six month *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and Published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, Kyobashiku, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google
Original from COLUMBIA UNIVERSITY